

# 生物学はエンタメにもなる

八戸工業大学 工学部生命環境科学科 教授 博士（農学） 星野 保

科学者は、研究対象を客観的に観察する訓練を受ける。

だが所詮、赤い血が流れる人間なので、それぞれに喜怒哀楽があり、学術論文ではこれがじんわりにじみ味となる。

本になるとさらにおだって本能解放(?)に至る例もあり、生物学とその周辺ではこの傾向が強い。

ここで瀬祭よろしく採集品を披露したい。



## アフリカによろり旅

青山 潤

初めて読んだ時の衝撃と興奮が半端なかった。研究者がこんな風を書いて良いんだっ！と圧倒された本。自分の研究の記憶と記録を綴ってみようと思った時、この本を真っ先に思い出した。

伝説の海外ウナギ調査3部作は、ここから始まる！（じゃーん♪みたいな効果音と余韻を心の中に響かせて下さい）



## 菌世界紀行 誰も知らないきのこを追って

星野 保

上に触発された私が研究対象である雪腐病菌ゆきぐされびょうきんと呼ばれる、ゴマ粒ほどのキノコの種（たね：この個所、科学的正確性を担保していません）みたいなもんを北極、シベリア、そして南極に探す。艱難辛苦のフィールド調査で自らの主観をフルオープンにし、嘘偽りなく記した本。酒と涙なくして読めない筈なのに！なぜ科学解説ではなく、旅行記として評価されている…あれ？



## 菌は語る ミクロの開拓者たちの生きざまと知性

星野 保

上の出版直後から、菌の記述が極めて少ないと耳の痛い小言を頂き、さらには菌の個所を読み飛ばすと面白いとあらぬ方向に持ち上げられたことに悄然とした私が、この黒歴史を修正するため、一念発起し、滝行のイメージで記した、雪腐病研究者による雪腐病菌ゆきぐされびょうきんを知るための雪腐病菌の本（だけでは尺が持たないので、“寒さと生きる多様な菌たち”を紹介している）。



## 微生物ハンター、深海に行く

高井 研

キノコ好きの子はいる。でも微生物を愛する者の誕生は、やはり大学から（より正確には大学院から）だと思う。青年が微生物学者になっていく過程が熱い！行間を漏れ出すパッションが熱いを超えて、もはや暑苦しく綴られている。でもね、目に見えぬ微生物を語る研究者はこうじゃないと。自分が代弁したい菌の妻さが他人に伝わらないと思う。



## 謎のアジア納豆 そして帰ってきた〈日本納豆〉

高野 秀幸

やはり微生物でも食べ物になると、人を魅了する度合いが違う。UMA（未確認動物）を追うノンフィクション作家までも、納豆とその起源を求めてアジアを、日本を奔走する。学術的な後付けは、横山智著、その名もすばり『納豆の起源』（NHK 出版）を手にとって頂きたい。どっちを紹介するか迷いに迷い、今も悩んでる。もうこうなりや2冊1組で推すしかないよ。



## 鳥類学者だからって、鳥が好きだと思ふなよ。

川上 和人

言わずと知れた生物系エンタメ本の代表作。多分内容的には、鳥6：昭和のギャグなどその他4の配分で構成されている（と思う）。鳥・笑・鳥・鳥・笑の展開は、脳内でドリフト走行を思わせる急激な場面変換を求められ、鳥類学の知識を得ながら、脳を活性化しポケ防止に貢献していると言えなくもない。気に入れば『鳥肉以上、鳥学未満』（岩波書店）などに手を伸ばしてみたらいかがだろうか？



## ペンギンたちに会いたくて わたしの南極研究記

加藤 明子

このたなをながめて「こりゃ、ぜんぶ大人の本だすけ〜」と思ったあなた。だいじょうぶです。ちゃんと小さい方むけの本もえらんでいます。大人むけの本の作者のような、本はおもしろいけど、書いた人には会いたくない！電柱のかげに隠れて、こっそりかんさつしたいような「やばいやつ」(° Ⅱ° ;) じゃありません。数少ないちゃんとした大人のけんきゅう者です。ぜひよんでなんきょくをそうぞうして下さい。



## アリの巣をめぐる冒険 未踏の調査地は足下に

丸山 宗利

生き物好きなら、いつか新種に出会ってみたいと夢見るものだ。虫好きが大人になって、プロの研究者になり、意外な場所から新種の虫たちをザクザク掘り当ててくんだり、もう読んでいて本当にワクワクが止まらない。この本で出会う虫たちは、著者らの『アリの巣の生き物図鑑』（東海大学出版会）を開くと、カラーで眺めることができる。この図鑑も日本語でしか読めない逸品だ。



## 動物になって生きてみた

チャールズ・フォスター

それぞれの本を眺めて、こんなにエキセントリックな人（ヤバイ奴の敬称）がいるんだと驚くのはまだ早い。世界は広く、動物の感覚を知ろうと“科学的”に考えて、動物と同じ食物（アナグマならミミズとか）を口に、生活した（それも一部家族を巻き込んでいる）記録がある。ゲド戦記では動物に変身するのが楽しくて、人間に戻れなくなった魔法使いの話があるが、普通の人（マグル）が動物になるのは、そう簡単じゃない。



## 生態学が語る 東日本大震災

日本生態学会東北地区会 編

私は、この企画の裏に所属先のプチ宣伝を隠すことを企んだ。同じ学科の伝説の裏番的存在のコケ学者、鮎川恵理先生が参加している本書は、決してエンタメ的な読み物ではない。だが皆が忘れられない出来事を生物学と言うフィルターを通して、印象深く語られている。同じシリーズの北海道地区会がまとめた『生物学者、地球に行く』も、地球上のありとあらゆる生態系のエピソードを魅力的にまとめている。



## ダンジョン飯 1

九井 諒子

フィクションだが、主人公ライオスの持つ半端ない魔物の知識量とこれを語る姿に、仲間が引くところは、小さな生き物好きが高じて、生物学者になった際の典型的なあるあるだと思う。また、生物学を援用した魔物の設定がいい。スライムは透明な棘皮動物であり、「動く鎧」は軟体動物の群体と解釈される。そして巻末の魔物解説は、一行（いっこう）の最初の獲物である「歩き茸」と劇中本「歩き茸を追って」となれば、取り上げない訳にはいかない。

八戸工業大学  
工学部 生命環境科学科 教授 博士（農学）

はしの たもつ  
星野 保

寒さと生きる菌の暮らしをしらべ、人の暮らしに役立てるとうそぶき、早20余年が経過した。八戸には、この春移動し、教員1年目の様々な出来事を楽しんでいる。青森県東部と言えば、下北で冬季に採集される謎多きキノコ“寒茸”にとっても興味があります。情報をお寄せ下さい。



ハブブックセンター  
HACHINOHE BOOK CENTER

〒031-0033 青森県八戸市六日町 16-2 Garden Terrace 1F  
TEL 0178-20-8368 web <https://8book.jp/>